東奥日報

県南初の「ルタテラ療法」

青森労災病院（八戸） 希少がんに有効

抗がん剤より負担少なく

青森労災病院（八戸市、玉澤直樹院長）は、膵臓や消化管に発生する希少がんの「神経内分泌腫瘍」の治療に有効とされる「ルタテラ療法」を実施する体制を整え、3月下旬から患者の受け入れを始めた。放射性同位元素（RI）を組み込んだ薬「ルタテラ」を患者に投与する治療法で、抗がん剤治療に比べて患者の負担が少ない利点がある。同療法を受けられる医療機関は弘前大学医学部付属病院に続き県内2カ所目、県南では初となる。（千葉真由美）

特別措置病室を養生し、ルタテラ療法を受ける患者の入院準備を進める真里谷センター長（左から3人目）らスタッフ＝3月24日

青森労災病院が、がん診療センター内に新設した「RI内用療法センター」の真里谷靖センター長によると、神経内分泌腫瘍は年間発生頻度が人口10万人当たり3～6人程度、近年は診断技術の進歩により患者が増加傾向にある。

ルタテラは腕の静脈から点滴で投与。腫瘍細胞表面にあるソマトスタチン受容体を介して細胞内に取り込まれ、放射線で直接腫瘍に障害を与える。治療期間は約6カ月で、8週間の間隔で計4回投与する。投与後は一般病棟内の「特別措置病室」に入院し、体外に出る放射線が少なくなるまで3日程度過ごす。退院後も約1週間は、妊婦や子どもとの接触を避ける必要がある。

ルタテラは2021年から国内で保険適用となったが、入院治療が可能なRI専用病室を有する医療機関でしか治療を行えなかった。22年4月、一般病室でも適切な放射線防護措置を講じ、基準を満たした場合は入院治療を認可する法制度が整ったことから、青森労災病院は治療実施体制を整備。特別措置病室1室を設置し、今年1月に国の認可を受けた。同病室は通常、一般個室として使用し、同療法を行う際に室内を養生し、放射線管理区域を設けて使用する。

約1年前から東京・国立がん研究センターなどで研修を行い、同療法実施へ準備を進めていた真里谷センター長は「県南地域周辺の住民が遠方に行かなくても治療を受けられる意義は大きい。がん治療の選択肢としてルタテラ療法を知ってもらえたら」と話した。

令和8年4月4日掲載